

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 村上 正和

本論文は、明清期中国において演劇を通して形作られた社会的関係のパターンを、関連する王朝の政策の変遷と対応させながら、明らかにしようとしたものである。演劇にはさまざまな側面があるが、本論が焦点をあてたのは俳優とその庇護者との関係である。俳優が特定の主人に服役性をもつパターンを家班型、活動場所としての劇場での観衆の支持を受けて庇護者に対するパターンを劇場型とし、両者の関係から明清中国の社会の変化を描き出そうとした。

元来中国では俳優は卑賤な職業と位置づけられていたが、明末の流動的な社会状況は、士大夫が名のある俳優と結びつくことにより評判を高め、俳優もまた士大夫と結びつくことで富を獲得するという依存関係をつくりだす。そうした風潮は清代中期にも継続していく(1章)。そうした明末以来の演劇の盛行に対して、雍正帝は戸籍として定められた卑賤身分の楽戸を廃止して演劇の普及を追認すると同時に、その一方で官僚が俳優を扶養することを禁止して秩序の乱れに歯止めをかけようとした(2章)。しかし地方では地方官が劇団の重要な顧客であるのが現実であり、両者の依存関係は抜きがたいものであった。さらには軍隊内においても高位の者が兵士に芝居を上演させるなど、統治機構の内側にまで演劇は浸透していたのである(3章)。

一方で王朝自身はその統治において演劇を利用した。皇帝や皇太后の長寿を北京において祝う万寿盛典は、北京において演劇をさらに盛んにする契機となり、乾隆年間には内城にも戯園がみられるようになった。こうした風潮の中で、俳優や芸人になる旗人も現れる。劇場で活躍する俳優はもはや卑賤なイメージをもって語られる存在ではなくなる。そうした趨勢に歯止めをかけようとして嘉慶帝は内城での劇場経営を全面禁止する(4・5章)。家班型の関係は継続して存在していたものの、「状元夫人」の逸話が示すように、民間の劇場で人気となった俳優の中には士大夫を援助する者も現れ、劇場型の関係は新しいパターンとして併存していく(6章)。

未分類の膨大な檔案の中に散在する演劇関係の資料を精力的に収集し、明末から清代中期までを見通して、旧来からの家班型に劇場型のパターンが並列していく過程として整理してみせた功績は大きい。劇団俳優に焦点をあてているものの、演劇という営みの裾野としての農村芸能にも目配りがなされており、さらなる発展を期待させる。楽戸制度や劇場のあり方についてより長期の中国史全体の歴史的脈絡から解釈する余地、演劇が娯楽・芸能全体の中でしめる位置、ジェンダー問題としてほりさげていく可能性など、さらに追究すべき課題も少なくない。しかし、それらはまた本論文が示す視座の広さを示すものでもあることから、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。